

『リスタート』

打田中学校 3年 出口 昌太郎

学校へ行くとき、自転車のペダルはこんなにも重かったらうか。中学1年生のときの僕は学校に行きたいとかなりポジティブで、自転車のペダルは軽快、通学路からの風景も今よりずっと美しくみえた。しかし、今はどうだろう。空は晴れているが、どこか僕の心には雲がかかっていた。自分でもわかるぐらいに少し前の自分と今の自分は違っていた。

少し前までは、人前で何かするのが好きで、小学校の先生からメンタルモンスターと言われるほどだった。幼い頃からしているサッカーでも、全くミスを恐れない積極的なプレーをしていたのを鮮明に覚えている。そのときのあんたは何をしても上手くいくような雰囲気や背中を纏っていたと最近、母によく言われる。

打って変わって今の自分はというと、人前で何かをする機会があっても前のように積極的に僕がやりますの声が出なかった。これに関しては仕方ないと割り切れる。成長においての正しい道筋なのだ。しかし、それとは無関係に今の僕の心には雲がかかっている、以前よりも暗い。なぜだと思って考える前に、既に心当たりがあった。平日にて、少し苦手な子との会話。休日にて、サッカーの試合での不調。常時にて、いくら望んでも良い方向への結果が出ない自分の身長や顔の吹き出物の数。他人からすればなんとも小さな悩みである。だから、最初の方は気にせず生きようと思っていたのだが、最近の学校に行く自転車のペダルが重いことや、家族から以前より暗いと言われることから、塵も積もれば山となるが悪い方向に実現したというのを認めざるを得なくなっていた。家族に悩んでいるのかと問われたときも口では、いや全くというのだが内心は、なぜこんなにもうまくいかないのか。自分はダメなやつだと自分自身を嫌悪するため息が続いていた。そんなことが続いたある日、僕の気持ちの弱さが溢れた。その日は自分のサッカー人生史上、最も最悪な日だったように思う。それを感じたのは周りも同じようで試合後にコーチに呼ばれて、

「なぜそんなに迷ってプレーをするんだ。今のお前はミスひとつを引きずりすぎている。前のお前はもっと全力でしていたぞ。」

起きているのに起こされる、そんな口調だった。そして、僕は起きているのに目が覚めた。

僕はメンタルモンスターなどではなかった。何か嫌なことがあったとき、僕は山に来る。その山で発した第一声がそれだった。飾りの1つや2つなくてもクリ

スマスツリーは完成するが、飾りをつける木がなくてはそもそも完成しない。今の自分はまさにそのような状態だった。たとえ失敗続きでも出口昌太郎は終わらないが、その失敗の2倍の数を成功に変える勢いの気持ちがないと出口昌太郎は終わるのだ。今までの自分のモットーはそれだったはずなのに泣きっ面に蜂が何匹も来ていつしかそれを忘れていた。そのことを忘れて支柱がなかったときの僕は自分が大嫌いで、何をするにも嫌な仕事のようにため息ついて行っていた。しかし、それでは自分は成長しないのだ。大事なものは誰より、何より自分を愛すること。自分を愛せば、たとえ心細くなったり、困難がやってきたりしても、自分の大切なものを守りたくなる。それが自分であるとしても。今、暗闇の中にいて昔が恋しくても、昔も今も自分は自分だ。過去の自分を愛せるならば、今の自分もきっと愛せると僕はやっと意志が固まった。心にかかった雲も少し時間が過ぎれば消えて、きっと虹がかかる。なぜなら、僕の心には第2のメンタルモンスターが誕生しようとしているからだ。山の中でそう悟った僕に大きな声で初夏のウグイスが鳴き、リスタートの合図を告げた。

